

「私の邪馬台国論」の主張の論旨

1 魏志倭人伝の距離は大幅な水増しとなっており、距離の修正が必要である

① 世界地図を開いて、「漢書西域伝」で長安から1万2000里とされている場所と魏志倭人伝で帯方郡から1万2000里とされている場所（八女、宮崎、奈良）を比較すると、一目瞭然で魏志倭人伝の方の距離が何倍も短い。従って、全体の距離が大幅に縮まるのだから、不彌国から邪馬台国までの距離（1300里）も当然縮まり、そのままでは利用出来ない。

② そのためか、魏は短里の制度であったという考えもあるが、陳寿は中国が世界の中心であり、西も東も当然1万2000里あると考えていたのだから、「東は縮尺した1万2000里でよし」とする考えはなかったものと思われる。

2 距離の修正と大体の位置の特定

手法としては、

① 全体が含む大きな誤差を無視し、不彌国から邪馬台国までの距離が全体の何%を占めるかを出し、実際の距離にこの%を掛けて大体の位置を決定する。

② 海上移動の部分は誤差が大きいのので除き、九州上陸後の各場所間の誤差から不彌国から邪馬台国までの距離が含む誤差を推定し、大体の位置を決定する。の二通りが考えられるが、両者を併用比較して距離を出すと、不彌国から邪馬台国までの距離は100キロ前後となり、奈良や宮崎にはなり得ない。

3 日数の調整（日数は「旬」と「日」を同じと誤解した）

不彌国から邪馬台国までの距離が100キロ程度だとすると、合わせて海行30日、陸行30日という日数はとてもかからないから、日数の部分にも何等かの大きな誤解が生じたものと思われる。この誤解については推察する他はないが、おそらく帯方郡の役人が朝貢を希望する倭国の事を魏に事前に報告するに際し、使節の名、構成国数等と共にその位置や距離を確認した。その際、帯方郡の役人は「彼等がはるばると来た」と言っていたので最初に里数で距離を尋ねたが、難升米等はその制度を知らず答えられなかった。そこで、次に「旬」で日数を尋ねたところ、暦の制度に不案内な難升米等は日数のことだと思い、日数を答えた。

そのため、事前に魏に報告された日数は10倍され、これが公文書として残り、陳寿はこれを見たのではないかと推察したものである。従って、誤解は互いに悪意のない思い違いであったものと思われる。

4 不彌国から邪馬台国への行程

こうして、不彌国から投馬国までは水行2日、投馬国から邪馬台国までは水行1日と陸行3日となる。また、それまで東行であった陸路が不彌国で南に折れて水行となるのだから、「川行」（海はない）となるが、2日、1日という水行なら、陳寿も当然、「川行」を考慮に入れたものと思われる。

邪馬台国の位置について

会員番号 10273

平松 全一

1 不彌国から邪馬台国までの日程

魏志倭人伝によれば、不彌国から南の投馬国に行くには水行 20 日、投馬国から南の邪馬台国（女王が都する所）に行くには水行 10 日と陸行 1 月を要すると記されており、明記はされていないが（隋書倭国伝には明記）、倭国の民は距離を里数で表すことを知らないので、日数で表しており、ここにはその日数を記すという体裁が取られている。

こうしたことから判断すると、里数の測定が正確であるかどうかは別にして、里数が書かれているということは、里数を測れる者がそこまで行ったということであり、魏の使節は不彌国（九州北岸の沿岸域）までは行ったが、投馬国、邪馬台国（九州の内部域）には行っていないということになる。

従って、不彌国から邪馬台国までの距離は、魏の使節である梯儁等が倭国に来て伊都国に滞在している間に、誰からか聞いたのか、帯方郡が邪馬台国からの朝貢を魏に報告する際に、難升米等から聞いたものと思われる。

また、投馬国から邪馬台国までの距離については、「水行 10 日」と「陸行 1 月」の間に「又は」を表す文字がないから、加算の日数と考えられる。

2 「陸行」と「水行」について

次に、「陸行」と「水行」についてであるが、「陸行」については町や村を歩こうと、山野を歩こうと、すべて「陸行」であるが、「水行」の場合は、主として「海行」と解され、「川行」は含まないような観がある。しかし、川を利用して人や物を動かせば、陸路より楽に多くの荷物を運べ、かつ早い場合もあり、中国では勿論、帯方郡や朝鮮諸国でもその利用が行われていたであろうから、朝鮮半島南部に居住したり、帯方郡や朝鮮諸国と市糴していた倭人の中には、こうした知識や船の製造技術を持つ者がいたと思われ、九州北部域で川の利用が始まっていたとしてもおかしくはない。ただ、何処でどう使われていたかは、直ちに立証は出来ないが、当時の通商の大動脈である九州北部と筑後地域を結ぶ経路を考えてみても、陸路が山道で通行に難渋したのに対し、低地には宝満川や筑後川流域の湿地が広がっていたのだから、水行の方が効率的であったと考えられなくもなく、「水行」は「川行」を含むと解すべきものと思われる。但し、陳寿は水行 20 日とか 10 日という日数から考えて、これは「海行」と判断したものと思われる。

3 不彌国の位置と領域

不彌国は、朝鮮半島南岸の狗邪韓国から渡海して対馬国、壱岐国を経、九州北部の末盧国に上陸した後、概ね東に向かって進み、伊都国、奴国を経た東側にある国であるが、末盧国は唐津市附近、伊都国は前原市附近、奴国は福岡市博多区附近でほぼ確定しているから、不彌国は現在の宇美町を含む糟屋郡を中心にした地域かと思われるが、末盧国以下、それぞれの国の領域がどの方向にどのように広がっていたかは全く不明であり、戸数により国の大小がわずかに推定できるだけである。

そこで、不彌国の位置と領域をある程度判断しようとする、まずその戸数に注目することになるが、戸数は千余戸で大きな国とは思えないから、現在の宇美町・大宰府市附近が国の中心だとすると、博多湾方面まで広がっていたとは思えないし、国の中心が博多湾方面にあったとすれば、現在の宇美町・大宰府市附近まで内陸に入っていたとは思われず、どちらかであったものと思われる。

では、いずれかということになるが、これを特定するため、「南、投馬国に至る水行 20 日」という記述に注目すると、「不彌国から南にある投馬国に行くには、水行で 20 日かかる」ということであり、一般的には、「投馬国は、不彌国から南に向かって水行して 20 日かかる」という意味に解されている。そうだとすれば、不彌国の南には海がないから川を利用することになるが、丁度、大宰府附近が分水嶺になっており、大宰府附近から北に向かう川は博多湾方向に流れ、南に向かう川は筑後川方面に流れている。従って、不彌国から南に水行するためには、宇美町・大宰府市附近（旧来の郡名で言うとはほぼ「御笠郡」に重なる部分）の近くを南に流れる川が必要となる。

しかし、この部分の記述をよく見ると、「南にある投馬国に行くには水行で 20 日かかる」となっているだけで、どの方向に水行するかは記されていないので、東又は西に進んだ後、南に南下する方法も考えられ、この場合は「海行」で、不彌国は博多湾方面を中心とする領域の国となる。だが、ここでポイントとなるのは東向きに進んでいた道が不彌国で南に折れるということであり、そこには更に東に進んだり、逆に西に戻って南下するというようなニュアンスは全く含まれていないから、この論法は不適と思われる、宇美町・大宰府市附近が不彌国の中心ということになる。

そして、この「不彌国で南に折れる」という部分を地図で確認すると、そこは現在の九州北部沿岸地域と筑後地域を結ぶ主要道沿いであり、全般的に低地（海水位が高かった時代には海が侵入していたと思われる）であるから両側の山地から小河川が水と土砂を流し込み、広い湿地帯になっていたものと思われる。

4 魏志倭人伝の日数の意味と経路の表し方

この当時、遠い地方まで何日も泊りがけで旅をする者は、通商（市糶）に従事する者や北部九州諸国の官吏等に限られていたため、定まった航路や整備された道は少なく、宿泊施設のようなものも少なかったと思われることから、旅人は、食糧調達の都合や天候状況の変化等によって足止めを受ける場合があり、目的地までの予定日数はある程度変動したものであると思われる。従って、「不彌国から投馬国まで水行 20 日」、「投馬国より邪馬台国まで水行 10 日と陸行 1 月」と言っても、多くの人が、正確にその日数かかるということではなく、ほぼその程度の日数が必要であるという意味に理解しているものと思われる。

また、魏志倭人伝によると、経路は不彌国の南に投馬国があり、その南に邪馬台国があることになっており、これらの国は接触する形になっているが、これは 6 で後述するように、魏への朝貢使節であった難升米等が、魏本国に朝貢を知らせる帯方郡の役人に「旬」と「日」を同じと考えて不彌国と投馬国、投馬国と邪馬台国の距離を答えたように推察され、日数が 10 倍になっている（実際は水行 2 日と水行 1 日、陸行 3 日）ので、接していても何等おかしくはない。

5 邪馬台国の決定

(1) 日数から距離が出せるか

不彌国から邪馬台国までの距離が日数表示となったため、1 日当たりどれだけ進むかを出さないと距離が出ないことになるが、陸行、水行では 1 時間当たりどれ位進むのか、1 日何時間位行動するのか、この日数は休止したり、天候や食糧調達で足止めされた日数を含んでいるのか、含んでいるとすれば何日位含んでいるのかといったことが、いずれも不明であり、日数から距離を予測することは困難である。なお、漢代の里数や隋・唐代の里数を参考にする方法や漢代の軍や郵遞の 1 日の進行距離を援用する方法はあるが、当時の中国と日本の交通事情の違い、天候の違い、生活習慣（休日の有無、1 日の歩行時間数等）の違い等から、そのまま利用できるかどうかには疑問があり、これも参考として援用するのが妥当と思われる。

(2) 帯方郡から邪馬台国までは 12,000 余里なのか

上述のように、日数から距離を出すのは難しいので、帯方郡から邪馬台国までの距離が 12,000 余里で不彌国までが 10,700 余里であるから、不彌国から邪馬台国までは 1,300 余里であるということに注目し、1 里を推定して場所を特定しようとする方もおられるが、その中の多くは、そもそも帯方郡から邪馬台国までの距離が 12,000 余里で正しいのかという問題を忘れておられるように思われる。これは世界地図を一見すればすぐわかることだが、「漢書西域伝」で漢の都

(長安) から距離が 12,000 余里となっている地域 (例えば、罽賓国 (カシミール) や烏弋山離国 (イラン東部)) と帯方郡から邪馬台国 (八女、宮崎、奈良など) までの距離を比較すると、帯方郡から邪馬台国までの距離が遥かに短いことは一目瞭然であり、帯方郡から邪馬台国までの距離は 12,000 余里もないということになる。従って、全体が 12,000 余里もないなら、不彌国から邪馬台国までの距離も 1,300 余里より短いのではないですかということである。

もともと、具体的な個々間の距離から見ると、帯方郡から末盧国までの海上距離の誤差が何れも大きく、こちらを縮めれば、1,300 余里 (これ自体も誤差を含むが) の方が幾分か増加する可能性はある。

こうしたこともあってか、「魏代には漢代の長さの単位を大幅に縮めていた」という考え方もあるが、もし、そうであれば、ある 2 点間の距離が漢書と三国志では大きく異なることになり、地理誌としての一貫性を欠くことになるから、陳寿はそれを説明したと思われるが、そうした記述はなく、その後の時代の史家もそうした記述は残してはいない。また、陳寿は「中国は世界の中心である」と考えていたと思われることから、西方が 12,000 余里あれば、当然東方も 12,000 余里あると考えていたはずであり、「縮尺した 12,000 余里でよし」という立場は取らないと思われるからである。

(3) 邪馬台国の位置の大まかな決定

従って、帯方郡から邪馬台国までの距離が 12,000 余里もないということになると、不彌国から邪馬台国までの距離も比例的に縮まるから、1,300 余里より短いのではということになり、別の方法で大まかな位置を求めることが必要となる。そのため、表 1 のような「実際の距離」と「魏志の帯方郡から邪馬台国までの里数距離 (1 里=430m)」を対比する表を作り、以下二つの方法で検討することにする。

第一の方法 (a) は、魏志の距離の含む誤差を無視して「不彌国から邪馬台国までの距離 (1,300 里)」が全体の 12,000 里の何%を占めるかを求め、その%を実際の距離に当て嵌めて比例的に出す方法であり、もう一つ方法 (b) は、それでは誤差の大きい海上距離の誤差がそのまま反映されるので、その部分を除き、九州上陸後の距離が「実際の距離」の何倍位の誤差になっているか調べて平均の誤差を出し、更に、平均を出すにはサンプル数が少な過ぎることを考慮 (一つ異常な値があると平均の変動が大きくなる) して、九州上陸後の各距離が含む誤差から 1,300 里が含んでいるであろう誤差を推定し、1,300 里からその誤差分を除いて正しいと思われる里数を出し、その値から大体の位置を決めようとする方法である。

(表1)

地域間	実際の距離	魏志の里数 12,000里の比例配分	魏志の距離換算 (1里=430m)	実距離との倍率
帯方郡から狗邪韓国まで (仁川→釜山まで)	730km	7,000里 58%	3,010km	4.1倍
狗邪韓国から対馬国まで (釜山→浅茅湾まで)	140km	1,000里 8%	430km	3.1倍
対馬国から壹岐国まで (浅茅湾→郷ノ浦まで)	70km	1,000里 8%	430km	6.1倍
壹岐国から末盧国まで (郷ノ浦→唐津まで)	40km	1,000里 8%	430km	10.8倍
末盧国から伊都国まで (唐津→前原まで)	35km	500里 4%	215km	6.1倍
伊都国から奴国まで (前原→博多まで)	20km	100里 1%	43km	2.2倍
奴国から不彌国まで (博多→宇美まで)	15km	100里 1%	43km	2.9倍
不彌国から邪馬台国まで i 不彌国→八女まで ii 不彌国→宮崎まで iii 不彌国→奈良まで	80km 420km 640km	1,300里 11%		
計		12,000里		

※ 余里は省略する。

まず (a) の方法であるが、全体の 12,000 里に対して「不彌国から邪馬台国までの距離 (1,300 里)」が何%を占めるかを見ると、表 1 から 11%となっており、帯方郡から不彌国までの実際の距離が 1,050km であるから、

(i) 邪馬台国が八女の場合

その実際の距離は $1,050\text{km} + 80\text{km} = 1,130\text{km}$ となるので、その 11%は $1,130\text{km} \times 0.11 = 124\text{km}$ となる。

(ii) 邪馬台国が宮崎の場合

その実際の距離は $1,050\text{km} + 420\text{km} = 1,470\text{km}$ となるので、その 11%は $1,470\text{km} \times 0.11 = 162\text{km}$ となる。

(iii) 邪馬台国が奈良の場合

その実際の距離は $1,050\text{km} + 640\text{km} = 1,690\text{km}$ となるので、その 11%は $1,690\text{km} \times 0.11 = 186\text{km}$ となる。

従って、比例配分して出した距離と実際の距離に近いのは (i) の 124km と 80km で、邪馬台国は大まかに八女の近くにあったものと推定される。

次に、(b) の方法であるが、(a) は朝鮮半島に沿った航海では潮の干満が大きい地域を沖に出ては陸に戻るような航海をしたためか、距離の誤差が大きくなっており、また、狗邪韓国から末盧国までは、これを一律に 1,000 里としたため、距離の誤差が大きくなっているため、これを除外し、九州上陸後の二点間の距離の誤差倍率を見ると、

末盧国から伊都国までの距離が実際の距離の 6.1 倍

伊都国から奴国までの距離が実際の距離の 2.2 倍

奴国から不彌国までの距離が実際の距離の 2.9 倍

となっており、それぞれの距離の平均誤差倍率を求めると

$$6.1 + 2.2 + 2.9 = 11.2$$

$$11.2 \div 3 = 3.7 \text{ 倍}$$

となり、魏志に示された末盧国から不彌国までのそれぞれの距離は平均で実際の距離の 3.7 倍の誤差を含んでおり、不彌国から邪馬台国までの 1,300 里も同倍の誤差を含んでいるとすると、実際の距離は 1,300 里を 3.7 で割った 351 里となる。そこで 351 里に一里=430m を掛けると $351 \text{ 里} \times 430\text{m} = 151\text{km}$ となる。

だが、距離が長くなれば、それだけ途中の障害物が増え、迂回したり、悪路を通行する可能性が増えることから、一般に誤差は大きくなると考えられ、不彌国から邪馬台国までの距離 (1,300 里) は末盧国から伊都国までの距離 (500 里) の倍以上、伊都国から奴国及び奴国から不彌国までの距離 (100 里) の 10 倍以上であることを考えると、誤差の平均倍率が 5 倍程度でもおかしくないと思われ、5 倍では $1,300 \text{ 里} \div 5 = 260 \text{ 里}$ となり、 $260 \text{ 里} \times 430\text{m} = 112\text{km}$ となる。

なお、参考のために、平均誤差が 4 倍の場合と 6 倍の場合を計算すると、
4 倍の場合が $1,300 \text{ 里} \div 4 = 325 \text{ 里}$ 、 $325 \text{ 里} \times 430\text{m} = 140\text{km}$
6 倍の場合が $1,300 \text{ 里} \div 6 = 217 \text{ 里}$ 、 $217 \text{ 里} \times 430\text{m} = 93\text{km}$
となる。

従って、邪馬台国の位置は 1,300 里が 5 倍程度の平均誤差を含んだ距離であるとするると実際は 260 里程度で 112km (6 倍なら 217 里程度で 93km) ということになり、不彌国から 100km 程度の距離となることから、邪馬台国は大まかには八女の付近ということになり、距離的に見て宮崎や奈良にはなり得ないということになる。

6 不彌国から邪馬台国までの経路と日程について

邪馬台国を八女附近だとすると、その距離は約 100km 前後であり、これに所要

日数が水行 30 日、陸行 1 月かかるとすると、1 日当たり 2km 以下しか進まないことになり、これは常識的に考えてもおかしい距離である。従って、日数にも何か大きな誤解があったものと思われる。そこで、では、何を誤解してそうなったのかを考えて見ると、どうも倭国ではまだ暦が浸透していなかったため、「旬」と「日」の区別を知らず、

旬（10 日単位）と日と同じ

と考えたことにあるのではないかということに気が付いた。

つまり、不彌国から邪馬台国までの日数を並べて見ると、水行 20 日、水行 10 日、陸行 1 月（30 日）となっており、きれいな数字が並んでいる。通常、不彌国、投馬国、邪馬台国の三国がこうした 10 日で割り切れるような都合のいい位置に偶然位置していたとは考え難いことから、4 に前述したように、多くの人は、その程度の日数がかかるという意味に理解されていると思われるが、実はそうではなく、暦の浸透がまだ不十分であったため、難升米等も通訳も共に暦に精通しておらず、「旬」と「日」を同じと誤解し、水行 2 日、水行 1 日、陸行 3 日が水行 20 日、水行 10 日、陸行 30 日となってしまったのではないかということである。

即ち、推察するに、帯方郡に到着した難升米等は初めて魏の役人と接触し、朝貢使節として魏に行くことを希望した。そのため、帯方郡は事前に朝貢する倭国王の名前、使節の名前、献上品、倭国の構成国の国名、位置、距離などを確認し、それを魏本国に報告して可否を打診した。この際、距離については、九州の内陸から苦勞してはるばる来たたと答えたので、帯方郡の官吏は相当の距離を来たものと思い、里数で距離を確認したが、倭国にはまだそうした制度はなく、難升米等や通訳は答えられなかった。そこで帯方郡の官吏は「では、何旬位かかったのか。」と尋ねたところ、暦がまだ十分浸透しておらず、「旬」の知識のなかった難升米等や通訳は「旬」を「日」のことであろう推測して日数を答えたため、記録が 10 倍になったのではないかということです。（難升米等や通訳が魏の暦制に精通していなかったことは、「魏志倭人伝」に「魏略」を引用して『其の俗、正歳・四節を知らず、但だ春耕・秋収を計りて年紀と為せり』とされている。即ち、倭国にも何等かの暦は入っていた可能性はあるが、彼等が詳しくなかったということ。また、里数を知らず暦も知らないと思われるのが悔しく、「旬」を「日」のこととして答えてしまったということがあったのかも知れない。）。

要は双方に悪意のない単純な言葉の誤解ということで発生したものであろうということである。

7 不彌国から邪馬台国への具体的な経路

以上の経過から、不彌国から投馬国までの日数は「水行 2 日」、投馬国から邪馬台国までの日数は「水行 1 日、陸行 3 日」となるが、前半の不彌国から投馬国

までの部分は、3で前述したように宇美町・大宰府市地域が中心になるので、そこから、その近くを流れる川を利用して南下することになる。

だが、この当時、どの川が何処をどう流れていたかは不明であるので、現在の地形から推察する外はないが、おそらく宝満川を利用したものと思われる。即ち、大宰府付近に宿泊施設があり、そこから東南東に進んで上宝満橋付近から乗船したのではないかということである。宝満川は概ね南西方向に流れた後、南向きに流れを変えるが、その流れの途中の段階で両側の山地から流れ込む小河川と合流し、低地の中央西より（最も低い部分）を流れていたのではないかと予想される。

また、この低地付近の傾斜は緩やかであるから水はけは悪く、周囲には湿地が広がっていたと思われ、夏でも水が枯れる心配はなかったが、川の流速は遅かったものと考えられる。そこで、こうした前提に立って、船での南下を考えて見ると、当時は1時間で何キロ進むといった概念はなかったであろうから、途中の適当な場所で休憩しつつ、今日はどこまでという進み方で進み、宿泊施設のある場所を繋いでいたものと思われる。そうすると第一日目の宿泊は小郡付近、第二日目の宿泊は宝満川が筑後川と合流し、筑後川を僅かに下った久留米（久留米は投馬国の都？）付近と考えられる。第二日目については、距離だけ考えればもっと進むことは可能であったが、その先に適当な宿泊施設が河口までなければ、やっぱり久留米で一泊となったものと思われる。

なお、地域の広がりとしては、3で前述したように不彌国はほぼ旧郡の御笠郡地域と考えられるが、投馬国は戸数5万戸（戸数が正確であるかどうかは別に）とかなり大きいので、旧郡の御原郡、御井郡、山本郡及び三瀦郡の一部を含む地域であったと思われ、地域的には主経路で不彌国と邪馬台国のそれぞれと境を接していたものと思われる。

なお、「投馬（ずま）」は三瀦（三瀦は「水間」で湿地の中の高所）の「瀦（ずま）」に由来するものと思われる。

次に、後半の投馬国から邪馬台国の部分であるが、「水行1日、陸行3日」となる。即ち、第1日目は久留米から筑後川を下って邪馬台国への入口となる河口港（川岸）まで進み、そこで上陸すると、そこから3日陸行して邪馬台国（八女附近）に至ることになる。第1日目の筑後川の下航については、川に流速があったであろうから、距離的に問題はないと思われるものの、後の陸行のことを考えると、筑後川の河口がどの辺りにあったのか、有明海がどの程度陸地側に侵入していたのか、といった問題を見極める必要があり、これらを佐賀県史等で調べて見ると、この当時の有明海は、貝塚や弥生遺跡の存在状況などから、佐賀市の南方附近から柳川市、瀬高町の南方附近まで侵入していたが、その後の筑後川、矢部川、嘉瀬川（佐嘉川）等の沖積作用と海退により漸次陸地が増大したとされている。また、筑後川は、当時「あばれ川」であり、本流は現在より筑紫山地寄り（国

道 246 号線の附近) を流れていたとされているが、十分な堤防がなかったことから支流がいくつかに分かれて流れており、周囲には湿地帯が広がっていたものと思われる。これは、この附近に“牟田、(湿地の干拓地) という地名が多いことから明らかであり、干拓は大化の改新以降、継続して行われたとされている。そのため、この附近は農耕には適していたものの、道路事情はあまり良くなく、荷物等を運搬できるしっかりした陸路は限られていたものと思われる。

こうしたことから考えると、上陸地は、今より筑紫山地寄りを流れていた筑後川の河口附近(今の佐賀市の南方附近)であったと思われる、今の大川市と似たような位置の河口港から上陸したものと思われる。この地は、位置を見ればわかるように、九州北部からの物資、肥前方向(小城郡、杵島郡地域)からの物資、投馬国や邪馬台国の物資、筑後川上流域(竹野郡、浮羽郡地域)からの物資、有明海からの物資を集積、配送するのに都合の良い位置にあり、人や物の交流が盛んであったであろうから、当然、同地には宿泊施設があったものと思われる。

また、同地を押さえる邪馬台国は同地に関所のような施設を設け、同国を公式訪問するような使節はそこで名前と用向きを確認し、本国に到着を連絡すると共に、必要な護衛を付けて本国に送ったものと思われる。

ただ、道が直線的であったのか、あるいは、迂回していたのかというようなことは全く不明であり、推定するしかないが、佐賀市南方の上陸地から八女に直線的に進もうとすると、湿地帯の中に道を造ることになり、工事が大変なことから、砂浜沿いに乾燥している海岸沿いの道(川の流れによって運ばれた砂は、海の波で川の両側に広がって砂浜を作り、土地は乾燥してくる)を柳川、瀬高方向に進み、瀬高から筑後、八女と湿地を迂回するように進んだのではないと思われる。

こうした進み方をすると距離は約 40km 程度かと思われるが、進み方は、陸上でも今日は何処までという進み方であったと思われるので、例えば、柳川と筑後附近に宿泊施設のようなものがあれば、そこまで 2 日で進み、筑後の宿泊施設で都への入城準備をして、翌日(3 日目)には余裕を持って邪馬台国の都に入るといったような方法もあったのではないと思われる。